

1990年6月10日

2 つ の 話 題

加 藤 昌 宏

私が鳥を見はじめてから40年余り経った。参考文献の乏しかったその頃とくらべて、最近、野鳥の生態や行動に関する著書や論文を読む機会が随分多い。しかし、その内容を吟味していると、私の観察や考え等とかなり違った解釈に屢々遭遇する。私のフィールドが神戸付近という一地域に片寄っているからかも知れない。同じ所に腰を据えて注意深く観察を続けると、2年や3年で結論をいそげば、表層は見えても、奥深くにある真実を見落とし、とんでもない判断を下す危険がいかに多いか、いやというほど経験させられている。



ソウシチョウ (再度山にて、1990年1月)

ここに提供する2つの話題は、まだ方向づけや考察が行なえる段階までには遠く、話のたね程度のものである。他地域で似たような話があれば、ぜひお教え頂きたい。

オオヨシキリの復帰と営巣植物の変化

かつて、神戸の西、加古川下流河川敷から河口海岸線に沿って、湿地やアシ原が広く続き、各種水辺の鳥と共に、オオヨシキリは普通に見られた。1970年頃より、河口の湿地は急速に埋め立てられ、鳥は姿を消した。下流河川敷は残ったが、定着するオオヨシキリは河口のそれに誘われるように居なくなった。その状態が10年余り続いた後の1984年、河川敷に突然10羽ほどの囀りが戻り、複数の繁殖を確認した。次の1985年は20羽ほどの囀りになり現在に至っている。アシ原の広さから、この辺りの数が定数と推測できる。河川敷の環境は変化なく、棲む鳥の種類は同じなのに、オオヨシキリだけが、長期の空白の後、突然に復帰したことに興味がある。なお、復帰した頃、近くで大規模な開発は見当らない。

さらに、復帰してからずっと、巣はアシの茎にかけられた巣だけであったが、1987年発見した6巣はすべてセイタカアワダチソウにあって、アシの茎は綿密に探したが見つからず、1988年は再度アシに戻っている。いくらかの探し漏れはあっても傾向は疑いなく、2種の植物の間を往復したオオヨシキリの選択の原因の説明に困っている。1987年だけ、アワダチソウとアシの成育に大差があったということもない。当地ではアシの群落が優位で、アワダチソウの群落はアシの間に小面積で点在し、草丈も低く占める面積も30%に満たない。なお1987年のアワダチソウの巣は、1つの群落に集中していたものではなく、それぞれ別の群落から、2週間ぐらいの間に発見したものである。

ソウシチョウの突然の増殖

ソウシチョウは、戦前に鳥獣店から逃げたものが六甲に棲みついた例がある。しかし、たびたび絶滅が噂される程度の低調な繁殖ぶりであった。その後、飼鳥が大量に逃げたという話も聞かないのに、1980年代に入った頃から東六甲を中心に目立ちはじめ、1982年には、20~30

会頭を辞任するにあたって

黒 田 長 久

1990年、そして平成、内外に新たな`気`の漂いを感じます。昭和57年、古賀会頭の後をお受けしてから7年間、評議員、役員各位の熱意ある運営と会員諸氏の深まる学究に支えられてまいりましたが、ここに突然ではありますが、会頭の責を辞することをお許し願います。これまでの感謝と共に鮮新の体制での新時代を期待致します。

私は、2年前から引退を考慮していましたが、去る4月8日の評議員会でその承認を得ました。それは、前日の4月7日、日本野鳥の会の評議員会で、山下静一会長が、80歳を越えて任期を全うされ、後任を私に託されたからです。

世界の鳥学界は若い時代が斬新の科学を競っており、日本でもすでに壮、若年層の頼もしさが増えています。今が正に交代の時です。私は、山下さんより10年若く、最後の年月を、今まで暖めた応用面の考えを元に、野鳥の会の使命に挑戦致したく思います。それは、アマチュアの質と量を倍増して、学会や保護への有為の新人を送り出すことです。英国の30万人に対し、日本(野鳥の会)の2万人は余りにも少いからです。

日本の鳥類の学協会は、それぞれの責務と特色を磨き、相互の“和と交流”を大切に、重要な事業、政策、国際交流などには、“鳥類学協会連合”として大きな役割を果たすという態勢づくりが、私の年来の夢です。

(前ページから続き) の囀りを登山道で聞き、幼鳥を伴う群を数回に亘って目撃した。1989年初夏では、六甲山頂付近を中心に分布を広げ、道路沿いだけで約100、谷から聞えてくる囀りを加えると300を越えるようになった。この周辺の同じ環境にも広がっているの、幼鳥や雌も加えた個体数は2000~3000羽と推定できる。冬には同山系の西端、須磨鉢伏山にも10羽近くの群が出現し、途中の再度山、布引(新神戸駅裏山)、鳥原貯水池、北区山田町など広範囲に漂行越冬していることがわかった。これらの地で、初夏にも定着し繁殖がはじまるのはそれほど遠くないと考えられる。

六甲の環境は今も昔もほとんど変わっていないし、類似の環境に棲むウグイス、ホオジロ、モズの分布もほとんど変わっていない。長い潜伏期の後起った爆発的繁殖の引金は何なのだろうか。東六甲で最も普通だったウグイスがソウシチョウの囀りに置き換えられてしまった昨今の状態はこれから先も続くのだろうか、そして、在来種への影響など、東京方面のインコ等と一味違った帰化鳥となりそうである。

特 集

続・地方鳥類誌——都道府県別出版目録

川 内 博

前回、全都道府県の114点をまとめたのは1984年3月(№13)。それから6年。今回は25の道府県から44点が集まりました。本の内容は前回同様、学術調査の報告書、写真集、随筆集などさまざま、スタイルも図鑑的なもの、ガイドブックを主としたもの、記念誌として作成されたものなどまちまちです。いずれにしてもそれぞれの道府県の鳥相を知るのに参考になるものばかりです。

【凡例】 この文献目録は、原則的に1984年以降に出版されたもので、都道府県全域について取り扱ったものだけに限った(鳥の場合は全島を網羅したもの)。記載順は書名(発行年)著・編・監修者、出版元、定価、() 付のものは定価は付けられていないが、その値段で販売しているもの、[]内はその本の内容を示したもので、総ページ数 D:データ E:解説 G:採鳥ガイド L:リスト M:分布地図 Pc:カラー写真 Pm:白黒写真 R:参考文献。順序はその本の重きをおいていると思われる順だが、厳密なものではない。

【北海道】

- a. 北ぐにの鳥(1984) 斉藤春雄. 北海道新聞社. 1,300円 [223pp.E.]
- b. 北海道探鳥ガイド(1984) 松田忠徳編. 北海道新聞社. 2,000円 [318pp.G.E.Pc.]
- c. きたの鳥たち(1985) 道生活環境部監修. 野生生物情報センター. 2,000円 [108pp.Pc.E.L.R.]
- d. 新版北海道の野鳥(1986) 藤巻裕蔵監修. 北海道新聞社. 2,000円 [314pp.Pc.E.]

【岩手県】

- a. 岩手の鳥類<岩手の生物>(1986) 安藤泰彦. 日本生物教育会岩手大会 [p.90-99.L.D.]
- b. 岩手の鳥獣百科(1987) 安藤泰彦他. 岩手日報社. 3,300円 [223pp.Pc.E.]

【秋田県】

- a. 秋田の野鳥百科(1984) 小笠原薫. 秋田魁新報社. 2,000円 [155pp.Pc.E.L.]

【山形県】

- a. 山形の鳥類<山形の自然-動物・植物篇>(1976) 県立博物館. 県高校生物教育研究会編. 刊行委員会. [p.134-171.E.L.Pm.R.]
- b. みちのくの野鳥(1989) 真木広造. 山形放送. 2,500円 [230pp.Pc.E.G.L.]

【福島県】

- a. 福島県鳥類生息状況調査報告書(1985) 県森林保全課編. 福島県 [345pp.D.L.Pm.]

【関東地方】

- a. 日本探鳥地図首都圏版(1985) 日本鳥類保護連盟監修. 朝日新聞社. 1,800円 [159pp.G.Pc.]

【茨城県】

- a. 茨城の野鳥(1985) 望月和男解説. 茨城新聞社. 2,000円 [252pp.Pc.E.]

【埼玉県】

- a. 埼玉の鳥とけものたち(1986) 県環境部自然保護課編. 埼玉県. 1,800円 [102pp.Pc.E.M.L.]
- b. さいたまバードマップ(1986) 埼玉県野鳥の会編. 埼玉新聞社. 1,280円 [110pp.G.]
- c. バードランドさいたま 埼玉の野鳥(1989) 埼玉県野鳥の会編. 愛鳥週間県実行委員会 [144pp.Pc.E.M.]

【神奈川県】

- a. 神奈川の鳥 1977~86(1986) 中村一恵監修. 日本野鳥の会神奈川支部. 1,800円 [218pp.D.L.M.R.]

【石川県】

- a. 石川の自然 野鳥(1990) 日本野鳥の会石川支部編. 橋本確文堂企画出版室. 4,800円 [176pp.Pc.E.G.L.]

【長野県】

- a. 長野県野鳥ガイド(1985) 日本野鳥の会長長野県内支部編. 信濃毎日新聞社. 2,000円 [277pp.G.Pc.E.]

【岐阜県】

- a. 「岐阜県の野鳥」補足(1983) 日本野鳥の会岐阜県支部 [16pp.G.]

【静岡県】

- a. BIRD WATCHING 静岡県の探鳥案内(1987) 日本野鳥の会遠江支部編. 発行. [135pp.G.Pc.]

【三重県】

- a. ふるさとの自然と鳥たち(1986) 笠井道男・樋口行雄編. 三重県. [162pp.Pc.E.]

【京都府】

- a. 京都の野鳥図鑑(1989) 河合敏雄. 京都新聞社. 2,575円 [281pp.Pc.E.R.]

——特集・続地方鳥類誌——

【大阪府】

- a. 大阪府鳥類目録(1987) 日本野鳥の会大阪支部編・発行. (1,500円) [82pp.D.L.Pc.]

【兵庫県】

- a. 兵庫の野鳥(1984) 神戸新聞出版センター編・発行. 2,000円 [198pp.Pc.E.L.]
 b. 兵庫県の鳥類〔県鳥類生息分布調査報告書〕(1989)兵庫野鳥の会. 兵庫県. [400pp.M.D.E.]

【岡山県】

- a. 岡山の野鳥(1988) 日本野鳥の会岡山県支部編. 山陽新聞社. 2,300円 [263pp.Pc.E.G.L.]

【山口県】

- a. 山口県の野鳥ガイド(1989) 県立山口博物館編・発行. (4,000円) [251pp.G.E.D.Pc.]

【徳島県】

- a. 徳島県野鳥図鑑(1985) 日本野鳥の会徳島県支部. 徳島新聞社. 2,500円 [310pp.Pc.E.L.]
 b. 徳島県鳥類目録(1987) 日本野鳥の会徳島県支部編. 発行. 4,000円 [339pp.L.D.E.Fm.R.]

【愛媛県】

- a. あなたの出会った鳥, 出会う鳥—愛媛の野鳥(1987) 日本野鳥の会愛媛県支部. 県文化振興財団 [220pp.Pc.E.G.]

【佐賀県】

- a. バードウォッチングガイド佐賀の野鳥たち(1987) 福田司. 佐賀新聞社出版部. [158pp.Pc.E.G.L.]
 2,000円

【熊本県】

- a. 熊本の野鳥百科(1988) 大田真也. マインド社. 2,000円 [254pp.Pc.E.L.]

【宮崎県】

- a. 野鳥はともだち—宮崎バードウォッチングの手引き(1987) 鈴木素直. 鯨豚社. [205pp.E.G.Pm.]
 700円
 b. 20周年記念誌(1988) 日本野鳥の会宮崎県支部編・発行 [98pp.L.G.]

【鹿児島県】

- a. 屋久島並周辺海域の鳥(1985) 中川曉之介. 著者発行. [20pp.L.D.R.]
 b. 同上補遺(1985)同上 [17pp.L.D.]
 c. 鹿児島県の野鳥(1987) 県保健環境部環境管理課 [99pp.E.Pc.]

【沖縄県】

- a. 沖縄県鳥類生息調査報告書(1981) 沖縄鳥類保護協会. 県環境保健部自然保護課 [60pp.E.D.L.]
 b. 沖縄県の鳥類<沖縄の生物>(1984) 与那城養春. 沖縄生物教育研究会 [p.267~280.E.]
 c. 沖縄県の野鳥(1986) 沖縄野鳥研究会編. 発行. 2,000円 [265pp.Pc.E.G.]
 d. 沖縄の野鳥観察(1986) 与那城養春. 新星図書出版. 1,800円 [166pp.Pc.E.R.]

その他

- a. バードウォッチングガイド日本の探鳥地 777・1 北海道・東北編(1984) 日本野鳥の会 [256pp.G.E.]
 1,200円
 b. 同上. 2 関東・中部編(1984) 同上 1,400円 [320pp.G.E.]
 c. 同上. 3 近畿以西編(1984) 同上 1,400円 [320pp.G.E.]
 d. 日本探鳥地図全国版(1986) 日本鳥類保護連盟監修. 朝日新聞社. 2,200円 [159pp.G.]

☆ 本リスト作成には豊田城健仁・竹下信雄・中川曉之介・宮林泰彦各氏のご協力を頂きました。

このリストに未掲載の出版物がありましたら至急ご教示下さい。

米国の鳥類研究者就職事情に関する

森岡氏の意見に寄せて

樋口 広 芳

米国の鳥類研究者就職事情についての私の一文（鳥学ニュース版 32）に対して、森岡弘之氏が意見を寄せられた（鳥学ニュース版 34）。森岡氏の意見によって混乱が生じた可能性があるため、ここで追加説明をしておきたい。

森岡氏は新任教官採用にあたって学生が評価に参加することはないと述べているが、私が一例としてあげたミシガン大学 Department of Biology での学生参加の例は、事実である。森岡氏の意見が出たあと確認の意味で、私は同大学同 department の Robert B. Payne 教授に問い合わせしてみた。次の一文は、それに対する返事であり、「評価」の内容もよく表している。「…大学院生は公開セミナーに出席することができますし、候補者に会って彼らと話すことができます。学生たちはそのうえで候補者たちを比較し、人事委員会に評価を出します。大学院生たちは、候補者の教授能力や研究指導能力についてのよき評価者です。私たちの department では、教官による評価と大学院生による評価とは通常一致します。人事委員会には通常、投票権のある大学院生メンバーが一人います……」

米国の大学人事でどのような形式の学生参加がどれだけ広く行なわれているのか、また学生によるそうした評価がどれだけ効力をもつのかはよくわからない。が、いずれにしても、絞り込まれた候補者によって公開セミナーが開かれるということは、広く行なわれているようだ。この点は何とかも注目すべきことだろう。この公開セミナーというのは、より多くの人に候補者の業績や素顔を知ってもらおうという点ですぐれている。森岡氏が以下に言うように、日本の大学でもかなり開かれた人事をやっているところはあるが、数は限られているだろう。

森岡氏による意見の後半部、教官の一時採用の件については、森岡氏のいわれるとおりである。私はそれをも当然知ってはいたが、米国の鳥類研究者就職事情についての総説あるいは概説を書くつもりはなかったので省略した。あの限られた紙面の中での一文は、日本でも研究者の採用がもっと公明正大に行なわれ、また、鳥学会の大会に学生もプロももっと積極的に参加し発表してもらえたら、と願って書いたものである。

米国における学生の地位と

森岡氏の記事への補足

藤 岡 正 博

鳥学ニュース版 32 の樋口氏の記事に米国留学経験のある森岡氏がコメントされている。二つの記事には若干の食い違いがあるようなので、おもに米国での大学職員人事についての学生参加について少し補足しておきたいと思う。滞米中に私のいたオクラホマ大学で新規採用人事があり、その観察の機会があった。しかし他はおもに現地の人から聞いた話であることをあらかじめお断りしておく。ここでは「学生」とは大学院生と学部学生の両方を含むものとし、区別する必要があるときには明記する。

アメリカの大学での教員採用手続きは一定ではないが、おおよそ次のようである。日本のように講座制をとらず、各教員は独立して「教室」（日本での学科に近いが、ふつう規模がもっと大きい）に所属しているので、まず空ポストあるいは新ポストにどういう分野の人を募集するかを、教室内の全教員またはその代表で（基本的には）白紙から決めることになる。この時に、例えば分類学派対生態学派などという対立が生じることもある。こうした議論に学生が参加できる制度がある所は少ないであろう。公募は大学や学会のニュースレターなどを通じて公にされるのは日本と同じだが、樋口氏の言われている通り競争はよりきびしい。例えば動物生態学といった公募なら、英国人やカナダ人など外国人も含む 100 人以上が応募してくることはまったく珍しくない。

絞り込まれた候補者が公開講演をするのは常識化している。これは森岡氏の言われるように完全に公開であるのが普通である。この点だけを考えても日本よりずっと進んでいると思う。ただ、その先の学生参加については、参考意見として評価について投票させるところもあるという程度で、人事の決定権はあくまで教員層にあるようだ。また、必ずしも公正とはいいがたい人事もあるようで、私の友人も某大学で当て馬にされたと怒っていた。なお、樋口氏は日本の大学では人事は教授会（の一部）で極秘のうちに行なわれるように言われているが、これは大学あるいは学部によるだろう。私がかつていた大阪市大・生物では人事委員会に院生代表が加わっているし、現在いる名古屋大学・農学部では人事は基本的に学部内公開で行なわれ、学生を含む講座内の会議では公募書類をもとに業績などを議論している。

さて、森岡氏は教官と学生の身分差は日本よりアメリカでは大きいと思われるようだが、私には疑問である。確かにアメリカでは学部学生はまさに学生扱いされる。生徒というニュアンスに近い。しかし、大学院生は別だ。彼らの多くはTeaching Assistantとして授業を補佐するか、時には任されて、大学から給料をもらっている。また、多くの研究基金が大学院生の応募を認めているのも日本とはずいぶん違う（日本では博士課程在学中の日本学術振興会特別研究員が科研費に応募できるのが例外だろう）。ただ、教員と学生の間関係は様々だ。私のいた2大学ではお互いにファーストネームで呼び合っていたが、教員がやたらと威張っている所もあると聞く。一般的には日本よりはましだとは思うが。

いずれにしても、大学システム全体が日本と米国ではまったく異なるので、両者の比較は簡単ではない。アメリカの大学にもいろいろ問題がある。我々としては良いところを取り入れつつ、長期的には日本の大学のあり方を考えていく必要があるだろう。

英国の鳥類研究者就職事情

大庭照代

私がロンドンから日本へ帰ってきてから、早くも3年がたとうとしている。1978年から足掛け9年も滞在したが、一時期は真剣に英国での就職を考えて、毎週NatureやNew Scientistの求人情報に目を通したものだ。これは職を探す常套手段で、学生も先生も皆、これらのページを繰る。私の師のキャッチボール博士は、今はロンドン大学の動物行動学のリーダー(Reader: 高級講師)に任命されて安泰だ。しかし、1980年代の初め、サッチャー政権下では、生産性と経済性に結びつく研究と機関が優遇されて、所属カレッジの危機が高まっていた。机の上に、赤で丸く囲まれた公募記事が広げられているのを見て、とてもショックだった記憶がある。

私は、今でもときどき気分転換にこれらのページを繰ることがあるけれども、相変わらず応募できる職は少ない。もちろん、これは自分の専門領域からの印象だから、鳥類学全体の就職状況については異なる。思い出せば、3か月ほどの野外調査員、1年かぎりのプロジェクト、数年にわたる研究、ほとんど永久就職と考えてよい教育研究職など、大学ばかりでなく、地方公共団体や国家研究機関、またNGOなどの非営利民間団体から、鳥の専門家が公募されていた。生理・生態・行動・遺伝・自然保護区管理など専門領域は絞られているようだ。

応募者は、ふつう人種や性による区別はないから、要求資格や給与などの待遇が見合えば、履歴書(CV)を送付する。履歴書では、自分の経歴をいかに効果的・魅力的に表現するかが重要だ。私の知っている大学では、こうして英国ばかりか世界中から殺到した、ときには数百人にもおよぶ応募者を、直接の担当者が書類選考で数人まで絞る。面接を行って適格者が選出される。最後に教授と講師陣の承認が必要だが、適任者が、その後人事委員会の教養試験で落とされるようなことはまずない。

● 栃木県那須野ヶ原から

現在、おもに栃木県北部の那須野ヶ原で、オオタカの保護や研究活動を行なっています。この地域は、標高200~300mのなだらかな扇状地で、農耕地や牧草地とともにアカマツを主体にした雑木林が広がっています。オオタカは、これらの林に巣をかけており、繁殖期には100K㎡あたり3~4つがいの割合で生息しています。ここでは、様々なキャンペーンを行なっている今でも、監視をしなければ巢内雛が密猟されてしまいます。また、ゴルフ場や宅地の造成、リゾート開発などが目白押しで、最近ではオオタカの生息地の保護をめぐって、開発業者や行政と折衝する機会が多くなってきています。これからこの地域の環境がどのように変わってしまうのかとても心配です。

一方、昨年(1989年)の4月には、この活動を行なったり、支援してくださっている方々が中心になり「オオタカ保護ネットワーク」が結成されました。現在会員は全国に約600名おり、12月にはニュースレター「オオタカ通信」創刊号(写真)も発行されました。今後は、各地でワシタカ類の調査や保護を行なっている方々と情報交換を行なったり、ラジオテレメトリー法を使ったオオタカの行動圏や環境利用の調査、ハイタカ属3種の比較生態の研究等にも取り組んでいきたいと思っています。
(遠藤 孝一)



● ツルの標識調査

1990年1月16日から2週間、山階鳥類研究所標識室の助っ人として、鹿児島へツルの標識調査に行ってきました。

今年はマナヅル5羽・ナベヅル15羽(保護放鳥5羽を含む)に、番号入りの黄色いカラーリングと、金属リングの上に個体識別用の小型のカラーリングをつけました。昨年までに出水で標識したツルは約150羽、そのうち今回確認できた個体はマナヅル18羽、ナベヅル50羽、クロヅル1羽でした。また、ソ連で放鳥したマナヅル7羽・ナベヅル4羽も観察できました。

あい変わらずのツルの多さには圧倒されましたが、驚いたことにその中に1羽だけ見られたアネヅルには、足環がついていたのです!! それも青いカラーリングに“01”と番号が入っていました。どこで放鳥したかはまだわかりませんが、たった1羽の鳥が私たちにいろいろなことを教えてくれそうです。

(長野県軽井沢町 馬場 孝雄)

● 福井県大野市六呂師高原に福井県自然保護センターを建設中。乞ご期待

私は今、7月オープンをめざして自然保護センターの準備に超多忙な日々を過しています。当施設は、木造を基調とした本館と観察棟をあわせて延約2500㎡の規模のものです。

自然保護思想の普及啓発を行うため、研究機能を備えた施設として、周辺約30haのフィールドの整備をあわせて、約13億円の事業です。スタッフは10名程度。少人数ですが、うち5名は専門性をもった職員を「獲得」できました。平成2年度の事業(資料収集、指導普及、研修養成、調査研究の4事業部門)は盛りだくさんなので、これ又事業執行に追われそうです。

という訳で、1984年から延7年目になる福井市一乗谷川の私のキセキレイ調査地と研究は、その変更を余儀なくされそうです。

ともあれ、山菜水明の地「越前大野」を見下す大呂師高原の自然保護センターからは眼の前に「日本百名山」の1つ荒島岳が、さらに大野盆地を隔てて越美国境の名山能郷白山を遠望できます。また、すぐそばには、昨年、イヌワシ繁殖地周辺のブナ林伐採でゆれた経ヶ岳があります。

会員の皆様、是非一度ならず、当センターと越前大野へお越し下さい（会員の皆様にはホテル割引恩典計画中。）（林 哲）

● 珍ミズナギドリと同定に悩む

1987年10月17日、時期はずれの台風通過により、珍しい海鳥2種が徳島県で発見されました。その1羽はヒメシロハラミズナギドリと同定しました。しかし、未だに釈然としない点が多くあります。文献をいくつか見ても識別の決定的特徴は、著者によりまちまちで、時に全く相反する記載すら珍しくありません。例えば、本種の外側尾羽は「白い」と記されているものもあれば、一方、「白さを欠く事が特徴である」といった具合です。同様に、全長や翼開長、足の色等々、文献により相当異なります。次に、当初ムナフシロハラミズナギドリと推定した個体ですが、後に初列風切の羽軸が白く見える点に気づき、も

しやカワリシロハラミズナギドリでは、と思いはじめ、「SEABIRDS」の著者ピーター・ハリソンへ問い合わせました。返事は、ムナフシロハラにも羽軸の白いものがある、との事でした。一体何を基準に同定すべきなのでしょう、悩み多い毎日です。会員諸兄のご教示をお願いします。

(〒770) 徳島市上八万町星河内 616
（曾良 寛武）



原稿募集中 / 400字程度で

前号から新設しましたN・E・W・S fileは会員からの投稿を中心に構成します。内容は、投稿者が責任の負える範囲内で、自由です。（従来のBIRD N・E・W・S, BIRD FILE, 読者の情報コーナーは廃止します。）

Movement

第2回 津戸基金によるシンポジウムの報告

第2回津戸基金によるシンポジウムは、1989年12月9日～10日の2日間、大阪市立大学理学部で「セキレイ3種の社会構造の比較」というテーマで行なわれた。遠くは北海道で、近くは京都でセキレイを調査・研究している8人により計12の発表が為され、14人の一般参加を得て行なわれた。

初日に、主に種間関係を研究している方に日本に生息するセキレイ3種の社会構造を比較して考察や問題を提示していただいた。翌日はその問題に沿って各種、各地での社会構造を詳しく紹介していただき、最後にセキレイの社会を成立させている要因について議論を行なった。今までの研究結果をまとめて問

大迫 義人
題点を整理し、さらなる調査・研究の役に立てることを意図したが、ほぼその目的を達成できたのではないかと思っている。

学会でなかなか会えない方に参加していただいたり、朽ち果てそうな過去の資料をまとめ論文化のために発奮していただいたことは大きな収穫であった。また、前年の長野での「カッコウシンポジウム」が有意義に終わったため、今回企画した私にとって少なからぬ不安はあったものの、終了後、「おもしろかったよ」という参加者の一言にほっとした思いであった。

最後に、シンポジウムのための基金を出して下さった津戸英守氏、開催の便を図って下

さった森岡弘之氏、会場と宿泊の手続きにおいてお世話になった山岸哲氏と幸田正典氏にこの場を借りてお礼申し上げる。そして、残念であったのは、予算の都合上、発表者の交通費を支出できなかったことであり、鳥学会からのバックアップをも期待したい。

幻に終わったゲラシモフ博士の東京講演会 呉地正行



マコベッコエ湖（カムチャツカ半島南部）でヒシクイ *A.f.serrirostris* に首環標識をつけるゲラシモフ博士（1989.7）

ソ連科学アカデミー太平洋自然地理学研究所カムチャツカ支部のゲラシモフ博士が昨年11月24日に、雁を保護する会の招待で来日した。12月2日には日本鳥学会主催の講演会（東京；国立科学博物館分館）が予定されていたが、飛行機便の都合で本人の講演は中止となってしまった（この原因は全て招待主体の雁を保護する会の不手際によるもので、紙面を借りて深くお詫びしたい。）当日は呉地が代役として、博士から預かった資料とスライドなどを用い、カムチャツカと日本に關係するオオヒシクイとヒシクイの個体群の日ソ共同標識調査のシステム、カムチャツカ州での禁猟区の設置状況、その生態と環境の紹介、共同調査の成果などについて講演を行った。これらの中には今まで日本では紹介されていないものも多く、空中写真など、繁殖地の環境を具体的に紹介したものも多かった。博士は豊栄市（新潟；11月25日）、仙台（11月26日）、若柳町（宮城；1月27日）で講演を行い、山階鳥類研究所や環境庁、文化庁を表敬訪問して12月1日に帰国した。博士の講演内容はワイルドライフレポートVOL.11に掲載される。また別刷も用意している。別刷希望者は下記まで。

〒989-55) 宮城県栗原郡若柳町字川南南町16
TEL/FAX 0228(32)2004

ポスター発表会兼忘年会の報告

上田 恵介

ポスター発表会は12月23日の午後2時半から立教大学一般教育部会議室で行なわれた。発表は (1)東京地方におけるイワツバメのコロニーの変遷 - 川内博（日本豊山中・高校）。(2)市街地におけるコゲラの繁殖記録 - 川内博（都市鳥研）・石田健（東大・秩父演習林）・土橋信夫（都市鳥研）・多賀レア（都市鳥研）。(3)東京都水道局水源林内の巣箱利用状況の比較 - 湯本光子（山梨県丹波中）・中村司（山梨大）。(4)カッコウが宿主の巢内へ頭をつっこむ行動について - 今西貞夫（和光大）。(5)移入外来鳥（ハッカチョウ *Acridotheres cristatellus*）の国内分布と生息状況 - 成末雅恵（女子栄養大・人間動物学研究室）。(6)都市緑地で生まれたハシブトガラスの一人立ち過程（予報） - 福田道雄（上野動物園）の6題で、時間をゆったりとって議論が交わされた。

忘年会は持ちより（ポトラック）形式という、初めての試みで、はたして料理を持ってくる会員がいるだろうか心配だったが、いざフタをあけてみると、手作りのおいしい料理やお酒がたくさん集まった（福井の上木泰男さんはクール宅配便で越前ソバを送って下さった）。遠く山梨から参加された中村司さんの音頭による乾杯のあと、夜8時まで楽しく歓談が続いた。池袋へくりだしての二次会も盛り上がったことは言うまでもない。当日の収支で、わずかだが余剰金があったので、学会の会計へ繰入れた。



愛媛大学農学部生物環境保全学大講座

立 川 涼

私どもの研究室は正式には愛媛大学農学部生物環境保全学大講座環境化学研究室というややこしいことになっている。人工有機化合物と重金属類の環境動態およびその生態系への影響を基本的なテーマとしているが、最近では地球規模の環境汚染、として熱帯域の諸問題と高等野生動物、とくに哺乳類・鳥類の汚染に関心をもっている。

鳥類の仕事は1972年、環境庁委託で鳥類の重金属及び農薬汚染の調査をしたことから始まる。その後いつも数人のメンバーがテーマこそ違え鳥の研究を行っている。最近の仕事を手挙げてみる。

- 日本における白鳥の鉛散弾摂取による中毒化(今年の鳥学会で発表)
- アホウドリ類は大量の水銀を肝臓に蓄積するにもかかわらず、死亡しないのは不活性の無機水銀の形のためであることの発見。高等動物はクジラ、アザラシの類以外は水銀は有機水銀として蓄積されている。鳥類も例外ではない。アホウドリだけが何故というのは大変興味ある研究課題と考えている。
- トビでは年1回の換羽で体内蓄積水銀の半分が羽に移る。これは結果として巧妙な水銀排出機構であり、一般に鳥はこの過程をもつため、それほど水銀を高蓄積しない。
- 渡り、産卵期などによる絶食過程で脂質が消費されると、脂肪当りの有機塩素(PCB, DDTなど)濃度が上昇し、結果として薬物代謝酵素の誘導や、酵素型が変化し、新たな毒性発現の可能性がある。
- 五大湖地方での鳥類の奇型発現とPCB・ダイオキシンなど有機塩素汚染との関係の示唆
- 鳥種による薬物代謝機能の違いと化学物質毒性発現の差異

化学物質はその微量、長期、複合的毒性影響が最大の社会的関心事であるが、極めて困難な課題であって、研究者はその要請に十分応えてはいない。ヒトはその生活条件の変動

が著しく、また汚染に強い動物とも考えられ問題を解く鍵としては必ずしも適当ではない。長期の影響を検出するためには、長寿命の野生生物が望ましいが、なかでも鳥類は化学物質に比較的敏感であり、しかも海生哺乳動物と異なり、人の目にもふれやすい。陸鳥、海鳥、植物食、動物食など多様な生態をもつ種の入手も比較的容易である。鳥類は化学物質による長期毒性の早期警報システムとしても有用であろう。その他諸々の理由から、これまで私どもが調査研究した鳥は国の内外で60種を越える。環境科学的観点からの比較鳥学、さらに大風呂敷を広げさせていただければプランクトン、魚から鳥類、哺乳動物を含む比較環境生物学を構築したいと夢みている。

研究室は田辺信介助教授、河野公栄助手、学振特別研究員1名、博士課程学生4人、修士課程学生10人、それに卒論生といった大所帯で留学生も4人を数える。さらに今年はベトナムとポーランドからの客員研究員の留学も予定されている。

私ども仕事にとって適切な試料の入手はその成否を左右する。しかし計画的な野生動物の捕殺は社会的な事情もあって容易ではない。機会を求めて事故死など死亡個体の収集に努めている。また有害鳥駆除などの機会も利用している。誌上をおかりして、会員の皆様にも御協力をおねがいがしたい。ただし、折角いただいても、当分は保管するだけで、分析結果が出るのは相当先ということも十分ありうることは予めお許しいただきたい。

総目次を準備中

1980年代最後の号(No.37)に、今までのニュースの総目次を予定しています。その際、今までの訂正・補記も載せたいと思いますので、執筆された方でお気付きの点がありましたらご一報下さい。

(ニュース編集幹事)

日本鳥学会 1990 年度 大会 告知

今年度の大会は、金沢大学の大串竜一教授を大会準備委員長として、下記のように開催予定です。北陸地区で大会が開かれるのは今回が初めてです。奮ってご参加下さい。

1. 場 所 金沢大学教育学部（一般講演）ならびに教養部（総会・シンポジウム）
2. 日 程 1990年10月13日(土)～14日(日)
 - 12日(金) 夜間：評議員会（評議員・幹事・監事・編集委員等）
 - 13日(土) 昼間：一般講演（口頭発表：2会場32題，ポスター発表：1会場20題の予定）
夕方：懇親会（大学生協食堂）
 - 14日(日) 早朝：エクスカージョン（金沢市普正寺の森にて探鳥会）
午前：一般講演（口頭発表：2会場16題の予定）
午後：総会／公開シンポジウム（大迫義人氏を中心に「ツルの行動と社会」をテーマとし、参加費無料で一般公開の予定です。）

3. 大会参加等の費用

参加費：1,500円（ただし、締め切り日以降～当日参加は2,500円）

懇親会：3,000円（締め切り日以降は原則として不可。ただし、空きがある場合のみ、先着順に3,500円で受け付けます。）

エクスカージョン：2,000円（マイクロバス代金等）

☆参加取消の場合も返金はしませんが、講演要旨集・パンフ等は後日お送りします。

4. 参加申し込み方法と締め切り

- 1) 一般講演申し込み …………… 9月10日(月)必着

★同封の用紙に講演要旨を作成の上、大会準備委員会あて送付して下さい。

★講演要旨のない申し込みは受け付けません。

★講演発表は一人一題、演者は学会員に限ります。

★先着順に68人（口頭：48人，ポスター：20人）までは受け付けます。

- 2) 大会参加・懇親会・エクスカージョン等の申し込み …… 9月10日(月)消印有効

★各費用の合計額（内訳を振込用紙の通信欄に明記して下さい）を下記の郵便振替口座に振込んで下さい。

★費用の振り込み以外に、参加受け付けは致しません。

★振込用紙の住所・氏名により参加予定者名簿を作成しますので、住所と所属等の異なる方は、通信欄にその旨を明記して下さい。

★学会員以外の方の参加申し込みも受け付けています。

- 3) 振り込み先 口座番号：金沢 1-8950，口座名：日本鳥学会 1990年大会

5. 発表形式（一般講演）……………詳細はプログラム（9月下旬発送予定）参照

口頭発表：1題15分（講演12分・質疑3分），スライドは10枚以内とします。

ビデオの併用を希望される方は、その旨を明記して下さい（OHPは不可）。

ポスター発表：模造紙2枚分の縦長サイズ台紙（109×158cm：パネルなし）

6. 宿 舎 …………… 各自で予約して下さい

金沢市街であれば、会場（金沢城跡）までの距離はいずれも徒歩10～15分程度です。

他の学会の日程と重なっていますので、旅行業者等を通して早めの予約をお薦めします。

比較的安い共済組合関係の宿舎(Tel)は、会館加賀(64-3261)や兼六荘(32-1239)など。

7. 申込・連絡先 日本鳥学会 1990年度大会準備委員会

〒920 金沢市丸の内1-1 金沢大学理学部生態学研究室

大串竜一または池田善英 Tel 0762-62-4281(内線554) 64-1059(FAX)

ニュースレターのレベルアップを

「鳥学ニュース」が本スタイルで発行されだして7年。編集内容は、原則的にまず特集に関連性のある巻頭言、そして特集。まとまった意見・見解を扱ったDiscussion、会員からの投稿・依頼をまとめたBIRDN・E・W・S、BIRDFILE、読者の情報コーナーなど、本会や他団体の動きを紹介したMovement (Meeting), 鳥学関係の研究施設を扱った研究室紹介、それに大会やシンポジウム・講演会の案内、事務上の諸連絡といったものでした。現在まで24号をかぞえ、それなりの内容で、会員の皆さんに一応の評価をいただいていたと思います。しかし、そのレベルはもう一工夫が必要という声も届いています。

そこで、来年度の1号(No.38)を目指して、レベルアップを図りたいと考えていますので、提案・意見・感想などをニュース編集部宛お寄せ下さい。(ニュース編集幹事)

【黒田会頭の辞任】

本会会頭黒田長久博士は、一身上の都合により本年4月8日の評議員会で会頭職の辞任を申し出られ、評議員会はそれを了承した。なお、評議員会が新会頭を選出するまで、現副会頭の中村司博士が会頭業務を代行される。

【幹事・委員の人事異動】

- ◆下記の人事異動が会頭によって承認された。①編集幹事：斉藤隆史氏(編集委員を辞任)。
②編集委員および庶務幹事：森岡弘之氏(編集幹事を辞任)。(以上本年4月8日付)
- ③ニュース編集幹事：上田恵介氏(編集委員を辞任)長谷川博氏はニュース編集幹事を辞任。(以上本年5月2日付)
- ◆基金運営委員会は、委員の互選に基づき次の人事を決定した。委員会の幹事：山岸哲氏(森岡弘之氏は同幹事を辞任)。(以上本年4月25日付)
- ◆学会誌への投稿原稿は、従来どおり正富宏之幹事(〒079-01 北海道美瑛市光珠内専修大学北海道短大)宛に願います。(以上庶務幹事)

【国際鳥学会議参加補助金の受領者】

伊藤基金による国際鳥学会議参加補助金の申請は昨年12月15日締め切りまで5名の申請者があり、基金運営委員会は委員による投票に基づき、江崎保男氏(兵庫県自然史博物館)、永田尚志氏(九大)、中村雅彦氏(大阪市大)の3名に補助金を支出することを決定した。詳細は学会誌39巻4号を参照されたい。補助金額は1人25万円である。

鳥害研究会の講演会(予告)

鳥害研究会は下記の講演会を計画しています。詳細は次号のニュースで発表します。①「種子食鳥類の生態」Pinowski, Anderson, Gorski, 1990年8月31日(金)、我孫子市鳥の博物館。②「鳥の音声とその利用」岡ノ谷一夫、大庭照代、西村欣也ほか、1990年9月16日(日)上野国立科学博物館講堂。なお、日本鳥学会はこれらの講演会を後援します。

鳥学ニュースへの投稿・意見などは、ニュース編集部へ
(〒112) 東京都文京区大塚5-40-10 日大豊山中・高校 川内 博 気付

鳥学ニュース No. 35

1990年6月10日 発行 (会員配布)

発行所 日本鳥学会 (〒169) 東京都新宿区百人町3-23-1
国立科学博物館分館内 (振替) 東京1-6599
(電話) 03(364)2311

発行人 中村 司 編集者 川内 博・上田恵介 印刷所 文英社印刷